



越智貴雄の

パラスポーツ 進化論

世界屈指のレースの空気が、「情熱細胞」を活性化させたとは思えない。

8月のコラムで紹介した蘭病中の副島正純選手(55)が、約1年ぶりの復帰レースに選んだのは、11月16日であった大分国際車いすマラソンだった。

スタート直後、先頭集団が一気にスピードを上げる一方、副島選手は自らのリズムを崩さずに走った。だが、走っているうちにスイッチが入った。

結果は、1時間38分55秒の15位。往時の成績にはまだ遠いが、周囲からフルマラソン出場は普通のことではない」と言われていたコンディションを考えると、完走の意義は大きい。

副島選手は昨年4月、悪性の脳腫瘍が見つかった。その後にあった前回大会は「頑張れるモチベーションがなかった」と大分入りながらも棄権している。

今年4月には、数カ月単位の余命宣告を受けたという。絶望に打ちひしがれなが

絶望を「終わらせる」



スタート直前、サムズアップで「レースを楽しみたい」と、穏やかな表情を見せていた副島正純選手—越智貴雄さん撮影

ら、副島選手は切り替えることにした。

「起きてしまったことは仕方ない。どうしようもない状況、逃げられない状況は自身自身で終わらせる」

23歳で事故により車いす生活になった時に思いついた境地だという。

仲間も存在も副島選手を前向きにさせる。友人の支援を受け、競技へ

の本格復帰と闘病費捻出のためのプロジェクト「SOEJIMA STRONG」を5月に始めた。チャリテイーシャツや帽子を交流サイト(SNS)を通じて販売し、国内外の人々とコミュニケーションを取っている。

大分国際車いすマラソンでは、レース前に車いすマラソンの男子元世界記録保持者、ハインツ・フライ選手

(67)「スイス」が、副島選手から直接Tシャツを購入した。

尊敬するアスリートからのエールに、副島選手は珍しく感情を表に出し涙を流した。この瞬間も副島選手にとってエネルギーになったに違いない。

レース前は「結果を気にせず、楽しみたい。生きていることを伝えたい」と語っていた副島選手。「一番を指す」と常々口にしていた彼から初めて聞いた言葉だったが、私自身、今回は本格復帰へのろしを上げるだけで十分だろうと考えていた。

しかし、表彰台にも届かない結果にフィニッシュ後はうつむき、「涙が出るぐらい、今の自分の立ち位置が悔しい」と声を振り絞った。

真の意味で、副島選手はレースの舞台に戻ってきたのだ。

今大会の3日前、98歳だった前回大会まで出場を続けた工藤金次郎選手が老衰で亡くなった。工藤選手はがんを患い片方の肺を摘出しながらも、「この大会があるから私は元気でいられる」と語っていた。

工藤選手の思いも、副島選手の背中をそっと押していた。(写真家)